

2017/3/28

(日々雑感 64)



「みんな僕のせいです」

「はい、はい、後はみんな僕がやっておきますから、どうぞお先に」
と言うのが僕でした。

それは、その後ろ姿を見れば何も言わずとも、そのうち家族が

「大変だね。じゃあ、少しお手伝いするわ」

と言う流れになるものだと信じていたからです。人はそういうものなのだと全く何も疑わずに「無邪気」に思っていたからでした。

ところが実際は

「こいつ、言えばなんでもするで。おもしれえ、どんどんしたろか。いいもの、手に入ったわ。使い倒したろ！」

と思わぬ展開に。

大いなる誤算でした。

誤算と言うからには「打算」もあったわけです。大人ですから。

元来、子供の頃から何か怒りを感じるような事が起こると、相手に向かわずに、歯形が立つほど強く自分の腕を噛んで相手に訴えるようなところがありました。

加えて、心の病で12年にわたって家族に迷惑をかけ、辛い思いをさせた償いの気持ちから、家族再興を願って一旦は向こうから離縁された元奥さんと再婚したことも含めて、大抵のことは自分に咎(とが)があり、やんぬるかな、自分の至らなさなのだからと胸の内に納めてもいました。

更に、どちらかという自分より「人を助ける」ことに喜びを感じるような傾向もあり、三つが重なって「こいつは言えば言うほど「生きがい」を感じやがって無理難題でもそれをエネルギー変換して、旨い汁を自家製造しながら、これから先、ずっと吸わしてくれそうだぜ」となったのかもしれませんが。

楽しんで甘い汁を吸いたい家族と、「人助け」と「苦勞」に喜びを感じるマゾっぽい僕との奇

妙な「共依存」関係が知らぬ間に出来上がっていたようでした。

話は変わって、自慢話というわけではないのですが、僕の親は結構お金持ちであったにもかかわらず、子供の頃からお年玉をくれたり、おもちゃを買ってくれたりすることが殆どありませんでした。そのせいで友達と遊んだ折、結構辛い思いをしたこともありました。

「自分のおもちゃを持っているのに、人のばかりを使いたがる」と濡れ衣をかけられたことも多々ありました。友達はお金持ちの子だから、当然自分のおもちゃを買って貰っていると思っていたようです。だのに遊びに持ってこないから「こすいヤツだ！」と言うわけです。しかし、親を恨んだことはありませんでした。逆にそれで、おもちゃもどきを自作することを覚えましたし、何故かヘンな潔癖症があって、お金持ちの子からスタートして「大人物」になっても「当たり前」としか思われなから、どうせなら「貧乏」からスタートした方がいいんだなどと大まじめに思っていました。

そうして、高校生の頃、音楽家の命である耳に絶望的な障害を得ながら大交響曲を生み出したベートーベン。その彼をモチーフにしたフランスの作家であるロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」を読み、その中の一節にあった「苦悩を通して歓喜に至れ」という文言に激しい感動を覚えことから、大の「苦勞好き」「苦勞マニア」になってしまったようです。

苦勞が多ければ多いほど実りは大きい。だったら苦勞は買ってでもしよう。それからの人生航路の進路表をそう描いたのかもしれないかもしれません。

それやこれやでぼくは、自分の家族にも、特に子供達には、どちらかというと言質素な生活を促しましたし、苦勞や困難から得られる価値を説いて聞かせたりもしました。

まだ世の中を知らない子供達は、親の僕が言うことを「それはそうなんだろう」と疑いもせずにはいたようです。

しかし、その頃の世の中は、デフレ停滞期の入り口と言うこともあり、どちらかというと言、それまで以上に、まずは自分を第一優先し、成る丈苦勞をせずに出来ることなら樂をして樂しく快適に生きる。そのためにはお金が何よりも必要だという風潮になっていたようです。そんな傾向が強まりつつある中、成長していった子供達が「どうもお父さんの日頃言っていることは、周りの家の人たちが言っていることとだいぶん違っている。いや、むしろ全く反対のことを言っているみたいだぞ」とおもいはじめたようでした。

その中でとりわけ、あまり友達と和する事が上手くないタイプの子供が、その友達と上手くいかない理由の一つとして「親から妙な考えを吹き込まれているから、友達と仲良くなれない、むしろそのじゃまをしているんじゃないか」と無意識にも密かに結論づけたとしてもおかしくはなかったのでしょう。

恐らくその子の中で対比図が出来上がっていったのだと思います。

「世の中お金だけじゃない」と「世の中お金だ」

「甘えるんじゃない」と「甘えてもいいよ」

「親は子を叱る」と「親子は友達」

「苦勞は買ってでもしろ」と「成る丈苦勞はさせないから」

えーっ！全然違うじゃないか！家だけ！なんやねん、これ！

折しもその子は、高校を不登校の末、這々の体で卒業した後、一人住まいをしてアルバイトをはじめたのですが、行く先々での仕事が長続きせず職を転々としていました。中には長続きする物もあったのですが、それはあまり人と接することの必要の無い、手作業的な仕事でした。ところが、人と接することが不可避な仕事では、人付き合いが上手くないその子は、それが理由で、職を得てもまもなく、顔を出さなくなり、いつしか逃げるように職場から姿を消したのです。

僕はその度に会社から呼び出され、平謝りに謝り、後始末をして回りました。

日頃は突き放しているが、いざという最後の最後には助けの手を出してくれるとその子は思ったかもしれません。

とにかくろくに仕事が続かないので、友達も居ないしお金もない。言ってみれば毎日が兵糧攻めのような生活だったようです。

あるとき、一人住まいのアパートから実家に帰ってきたときにその子が

「僕はお金が好きじゃないと言っていたけれど、それは違っていただよ。おかねが好きじゃなかったのは、お金がないからだ。あれば多分大好きなんだろうと思うよ」

それからしばらくしてその子は「金持ち父さん貧乏父さん」という本を読み、いたく感銘を受けたようです。僕にも読むように言いました。

そうして、ある日

「不労所得という言葉を知っている？頭のいいひとはみんなそうしている。金持ち父さんはそういう人だよ。これだよ、これ！」

働かないでお金が手に入る道。生き方。働かなくて済むから、職場にも行かなくて言い。職場に行かなくていいから、人と無理に自分を合わせる必要もない。あー、楽ちんだ。

と思ったのかどうか。

本来不労所得とは、労務、労役、労働以外の所得のことで、パーセンテージにすれば全体の何割かのはずなのですが、その子は不労所得が100%の世界を一方的想像したのかもしれませんが。つまり、全く働かなくてもいい生活を。

それから僕に「会社を興せ」と言ったり、自分でもしたようですが「株式投資をしろ」と言ったりしだしたのです。

しかし、それを言い出した当の本人の投資結果はさんざんだったようです。一時は上手くいっていたようなのですが。

一方その子には、僕と似たところもありました。それは、あるとき自分の給料を丸ごと全額寄付したり、株で儲けた利益を、お金がないと言っていた同僚に無利子でかしたりすることがあったのです。儲かっていたときの話ですが。

これは、ひょっとしたら「人助けマニア」の僕の影響の残滓がその子のどこかに残っていて、「お金だ！お金だ！」と言いながら、反面僕の意向に答えようとしたのかもしれません。

当然僕は、無利子貸与はともかく、少なくとも「給料丸ごと寄付」については、

「寄付するのは結構だが、無くなった生活費を僕が用立てるなら、それはおまえじゃなくて僕が寄付したのと変わらんだろう。おかしいと思わないか？」

と諫めましたが、それ以降更におかしな行動を取るようになったのです。

「折角おまえの考え通りしてやったのに、ケチ、つけやがって。もう知るか！！」

だったのかもしれませんが。

子供というものは、特に男の子供というものは、先を歩く父親に反発したり嫌ったりしながらも、往々にしてその同じ道の後について歩き、先を歩く父親の前に出よう、前から振り返って父親にもものを言おうとする傾向がなきにしもあらずなのです。自分自身を振り返ってみるとそうでしたから、その子もその傾向があったかもしれません。

それであるとき

「同じ道を歩かなくていいんだ。僕の道では僕がエキスパートに決まっている。それを越えてものを言うこと自体無理がある。エキスパートの前に出てものを言おうとするな。そんなことをするより、全く違う自分の道を見つけて、自分がその道のエキスパートになればいいんじゃないのか？」

その子は、全く意外な僕の話に「そうか、そうだったのか！灯台もと暗し、か！」と膝を叩いて、家を出ました。

僕は、瓢箪から駒ではありましたが、一時安心し、その子の旅路を遠くから見守るだけにして、もう余計なことは言うまいと誓いました。

しかし、世の中は、やはりそれほど甘くはなかったようです。

その後、息子は何回か家に戻ったり、又自立すると言って出て行ったりをくり返しました。

何年にも渡ってです。

しかし「来るものは拒まず、去る者は追わず」で居住こそ拒みませんでした。遠くからの見守り姿勢を死守して、手助けは一切これをしませんでした。

何度か出入りをくり返す度に、その都度あれこれ話をしたり、話がうまく伝わらなければ書き物にして真意を伝えようとしたもしました。

その度に、一時は納得して、又出て行くのですが、又戻ってくるのです。そうして、いつしか外で保証人なしのオプションで街角金融から借金をすることを覚え、その額がだんだん高額に累積されていったようです。

それでも、手は貸しませんでした。

あるとき

「本当に苦しくて仕方の無いときに、苦勞しろ、苦勞しろって。助けて欲しいのに、崖から落ちそうになっている僕を、その崖の上から見下して、ここまで上がってこい、自力で上がってこい！って何よそれ。土壇場にいる人間を目の前にして説教なんか垂れんな！！てめえ、それでも親か！！」

と怒り狂ったことがありました。

それでも手を貸しませんでした。

恐らく負のエネルギーがその子の中で爆発的にふくれあがり、当人は何らかの形でガス抜きしないことにはどうにもならなくなったのかもしれない。

いいか悪いかではなく、もうどんな形ででもガスを抜くしかない！に。

そんな折に、頸と腰の同時大手術をすることになりました。以前から不幸のデパートと揶揄され、とにかくツキにツイていない自分を思うとき、成功確率そのものはけっしてひくくはないのですが、例えばマイクロスコープグラスをしてコンマ何ミリの微細手術をしているときに、都心としては珍しく震度5強の地震が起これ、流石の名医の手元が狂うという確率的には殆どあり得ない事もリアルに想像して、やはり帰ってこれないかもしれないと腹をくくりました。

それで、此処は自分の親父がしたように、残った者のことを考えて、家族が困らないように、皆を集めて資産目録を渡したのですが、それが間違いだったようです。どうやらそれで、とち狂ってしまったのかもしれない。

術後、戻ってきたときには、その子と元奥さんの目がガラス玉のように無表情になっていて、あまりの無反応さを問いただしたところ、あれこれ言い逃れをするので、言い逃れの理屈を言うくらいなら、本心を言った方がまだ潔いというと

「ならば言うが、あんたは財布としてしか存在価値がない人間だ。金だけ残して死んでくれるのがベストだ」

と言いました。元奥さんも同意しました。

日頃の振る舞いと自分に対する扱いから、おおよそ予想していたので、あまり驚きませんでした。が、一気に解決への道のりが遠のいたような疲れを覚えて、脳内疲労レベルメーターが極限值を示したような気分になりました。

ですが、それでも、諦めず心の体勢を立て直して、二人だけのための物語に思いを込めて書いて渡したりしました。全部で4章50ページくらいのもので。

それで、一旦は、またしても納得して、むしろその子自身が、「仲間内」の元奥さんを諭したりするような全く意外な態度も見せて、今一度家を出たのですが、数ヶ月を経て戻ってきたときには、完全におかしなガス抜きをしてしまったらしく、こんなことを言ったのです。

「ぼくは居るだけで有り難い存在なんだ。だから働く必要はない。好きなことをやって暮らしていいんだ。借金も返す必要はない。使いたいだけ使えばいいんだ。僕が死んだら困るだろ？困るんだったら金、出せよ。無ければ家売れよ」

僕にはもう一人、男の子供が居ます。既に結婚して、僕から見たら孫に当たる子供もいて、普通に暮らしています。

一体どうして、こんな差が出来てしまったのか？同じように育てたつもりなのですが。

一体僕は、どこで掛け違ったのか？何を誤ったのか？何がいけなかったのか？

一体何が原因でこういうことが起こるのか？

現時点、まるでその真因が分からないまま、田舎の6畳1Kのアパートで、暴力と恐喝からのエスケープと、相互依存のお互いの甘えを断ち切るための待避生活を続けているのです。